

——この1年で鉄スクラップ市況が大きく変化した。

「鉄スクラップ市況の軟化が業績に影響を及ぼしているのは確か。しかし、原料相場の変動を理由に利益を計上できなかった、ではステークホルダーは納得しない。引き続き、安定収益につながる新事業の種まきをする。これまで行ってきた種まきが、よつやく花開こうとしている事業もある」

——具体的には。

「リチウムイオン電池（LIB）のリサイクルをはじめ焼却灰からの金銀滓回収、廃プラのケミカルリサイクル（ポリマー・サーキュラーエコノミー事業）の三つだ。LIB事業ではバッテリー工場からの発生材を集荷、ブラックマス（コバルトやニッケルなどの濃縮滓）を高品位かつ高効率で回収できる工場を2035年に向け全国に展開する計画。先行して稼働していた静岡工場に次いで昨

ENVIROホールディングス 佐野 富和社長



2025 トップインタビュー サステナビリティ経営の針路

「プライム市場再上場に向け稼ぐ力付ける」

している。それにつれ当社 当社ではそうした外的要因に寄せられる引き合いが多に左右されることがなく、くなっているのを実感する。今後着実な成長が見込める。今後着実な成長が見込まれる事業と言える。ただ、落じん灰を由来とする金銀滓回収の市場規模が100億円に対し、焼却炉底部から取り出される主灰由来は1千億円だ。主灰を回収、リサイクルする業者、最終処分場はすでに存在する。そうした業者とアライアンスできないか模索することも、選別技術の開発や分析

夏、新たに茨城工場が本稼働に入った。処理能力は両工場合わせて6千トだが、2030年には1万4千トにまで引き上げる」

——焼却灰からの金銀滓回収事業は。

「落じん灰からの金銀滓回収事業において、灰の回収率を向上させる。焼却炉を新設、更新する際、設備業者に落じん灰を回収することを入札（契約）条

リサイクル原料 仕組み構築で集荷力向上

（を指す）」

——同事業における設備投資はどうか。

「人手不足に対応しつつ生産性向上を両立させるため、シュレッダーの半自動加工の実用化に向け、設備を進めている。一定の加工量を維持、継続するためにオペレーション力が問われる。これまで熟練した現場スタッフが携わることが多かったが、そうでなくても対応できるように、働き方改革が進むうえに、人材配置がしやすくなる。また、難しいとされる廃タイヤからタイヤワイヤを剥離するラインを、エコなリサイクルの富士第三工場に新たに設けた。今年より本稼働に入った。他社が追随しにくいことの積み重ねにより、原料集荷における優位性が自然と生まれるのではないのか」

——スタンダード市場へ上場区分を変更する。

「流通株式時価総額が、プライム市場上場基準に達していない。短期で基準を満たすのは困難と判断した。同時価総額が基準に達しているという事は、我々の稼ぐ力が低下している。他社による参入障壁が高い。他社による参入障壁を解決できる事業を一つでも多く開発することがポイントとなりそう」

——なぜプライム市場への上場を目指すのか。

「同市場への上場基準が厳しい分、透明性が高いガバナンス体制の構築が要求される。同市場に上場している企業の社会的信頼や知名度が全く違つように感じられる。人材採用面や営業面で有利に働く可能性もある。どのようにして永続的に稼ぐ力をつけ、企業価値を高めていくかが問われている。まさに今、優先して取り組むべき経営課題だ」

（齊藤 直人）